

受 験 番 号						
M						

問題用紙

専門科目

[一般選抜]

問 以下の2つの設問に答えなさい。なお、それぞれの解答の冒頭に「設問1」「設問2」と明記しなさい。解答用紙は2枚ある。それぞれの表面のみを用いること。

設問 1 以下の 21 のトピック—— (1)「宗教」という概念、(2)呪術、(3)祈り、(4)戒律、(5)救済、(6)シャーマニズム、(7)聖地巡礼、(8)儀礼、(9)リミナリティ、(10)永遠回帰、(11)意味付け、(12)カリスマ、(13)救済、(14)機能分化、(15)私事化、(16)個人化、(17)現代社会における公共宗教、(18)進化論的近代化論、(19)北欧における文化的宗教、(20)日本における自然宗教、(21)これら以外の任意のトピック 1 つ——のうちから複数 (2 つ以上) 選び、それらについて、宗教学の観点から、必要ならば任意の具体的な事例を用いつつ、分かりやすく説明しなさい。その際、選んだ複数のトピックを別々に論じるのではなく、相互に関連づけながら論じること。なお、解答の冒頭に、選んだトピックの番号を明記しなさい。たとえば、(8) 儀礼と (9) リミナリティと (11) 意味付けを選ぶならば、解答の冒頭に「(8)、(9)、(11)」と記す。字数は、解答用紙 1 枚に収まる程度とする。

設問 2 日本の山岳信仰の特徴を 3 つ以上挙げ、それらを互いに関連づけながら分かりやすく説明しなさい。具体的な個別の山を事例として用いながら説明するのもよいし、日本の山岳信仰の全体的な傾向を専ら抽象的に論じるのもよい。字数は、解答用紙 1 枚に収まる程度とする。

解答例 **専門科目** **[一般選抜]**

設問 1

出題の意図：

宗教学の基礎的な概念・理論を理解しているかどうかを見る。

(14)、(15)、(17)

近現代ヨーロッパにおける宗教の変容を説明する理論は多くある。それらのうち、ホセ・カサノヴァは、機能分化論を用いた説明がその変容を説明するうえで最も有効であるとした。カサノヴァに倣い代表的な社会領域（社会的機能・制度）として宗教、経済、国家、科学を例にあげて説明しよう。近代以前のヨーロッパ社会では、宗教（キリスト教）の諸制度・機能は、経済や国家や科学のそれらと十分に分化しておらず、人々の経済活動や国政や真理探究の活動に大きな影響力をもっていた。近代化の一側面として生じた機能分化あるいは制度分化とは、経済、国家、科学といった社会領域が、それぞれ資本主義等、政教分離や民主主義等、自然科学等といった独自の原理と専門家を発達させ、宗教から自律することである。分化した各社会領域は、それぞれさらに内部分化を進めていく。たとえば科学は、人文学・社会科学・自然科学がそれぞれ独自の原理（ディシプリン）をもって確立し内部分化していく。同様に、他の社会領域から切り離されて新たな社会的居場所を得た宗教も、独自の内的分化を進めていく。

その一つのあり方が、宗教の私事化である。この理論の古典としてはトーマス・ルックマンのものが有名である。ルックマンは主にアメリカの諸宗教を題材に、社会の機能分化の結果、宗教は社会の多くを形作る社会制度であることを止め、その宗教を選んだ個々人のアイデンティティや生き方の問題になったと論じた。このように、宗教が社会の公的領域から撤退し、それを選んだ個々人の私的な問題になることを宗教の私事化と言う。

一方、上述のカサノヴァは、機能分化の進む現代のヨーロッパ・アメリカ社会においても、宗教が私事化された状態を脱し新たな公共的意義をもつことはあるとした。カサノヴァはこれを宗教の脱私事化と呼ぶ。これは宗教の内的分化の別のあり方である。彼は現代社会におけるこのような公共宗教のあり方を大きく3つに分類した。すなわち、①国家レベル、②政治社会レベル、③市民社会レベルでの公共宗教である。簡潔に述べれば、①は国教としての宗教、②は政治政党を作るなど政治活動を行う宗教的集団等、③の市民社会とは、自発的な個人や集団が経済や国家など社会の規範・構造に関する意見を発信し討議する社会空間（たとえば現在で言えばインターネット等）を指し、社会の機能分化の結果発達したものである。市民社会レベルの公共宗教とは、宗教的集団が国教という形も政治的政党など明確な政治的活動の形もとらず、討議のための市民社会に参加し、社会の規範（共通善）に関する意見を発信していくということである。カサノヴァはこれら3つのうち、社会の分化という構造を脅かさないのは究極的には③のみであるとした。

設問 2

出題の意図：

山岳信仰をめぐる任意の先行研究からその基礎的な概念や理解を得ているかどうかを見る。

日本における山をめぐる信仰や実践には様々なものがあるが、それらの間に普遍的でなくともある程度の共通点や傾向を見出すことは可能である。たとえば、鈴木正崇は『山岳信仰 日本文化の根底を探る』（中公新書、2015 年）の中で、山中他界観、曼荼羅世界、禁足地などといった概念を用いてそれらの傾向の一面を描いている。以下、同書の内容を参考にまとめたい。

山中他界観とは、山を、人が亡くなった後に死者の霊魂が赴く場とする考え方である。山は他界と同一視される。たとえば、東北地方の恐山や月山、関東地方の相模大山、近畿地方の高野山などは、死者の霊魂が集まる山として信仰されてきた。そこに仏教の影響が強く加わると、山中の他界は仏菩薩の居住地であり、極楽浄土（阿弥陀仏の浄土）、補陀落浄土（観音菩薩の浄土）などに見なされることとなる。山が、死後に赴く浄土と同一視されるのである。

同様に仏教の影響を受けて、山を曼荼羅と見なす場合もある。曼荼羅とは、伝統的に本質（曼荼）を宿す（羅）と語義解釈され、具体的には仏や菩薩や神々の集いを表す。様々な曼荼羅があり、曼荼羅によって程度は異なるが、一般に仏や菩薩や神々は一定の幾何学的法則に即して配置されている。山岳信仰の文脈では、山全体を曼荼羅全体とみなし、山中の各箇所を、その曼荼羅に配置される仏や菩薩の住处とする。修行者は山に入りそれら各箇所をめぐる等の修行を行う。真言宗では『大日経』が説く胎蔵界曼荼羅（慈悲を象徴する）と『金剛頂経』が説く金剛界曼荼羅（智慧を象徴する）を不二とする金胎不二の教えがあるが、奈良の大峰山ではそれを用いて山の意味づけを行う。すなわち、大峰山の吉野側を金剛界、熊野側を胎蔵界として、吉野から熊野へ、熊野から吉野へと峰入りの修行を行うことにより、金剛界と胎蔵界を不二とする境地に到達するというものである。

山は聖域とされることから、様々なタブー（禁忌）が設けられる。立ち入りが禁止された地を禁足地と言う。たとえば奈良の大神神社には拝殿はあるが本殿はなく、拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し三輪山を拝むという礼拝の形をとる。その山中には巨石が連なる盤座があり、そこに神が降臨するとされることから立ち入りは禁じられ、破れば祟りがあるとされた。

このように山は現世とは異なる他界や仏や菩薩の住处など霊的な場とされることから、山で修行を行うことにより特別な霊力（験）を身につけ、里に下ってその霊力で占いや人々の病氣治療などを行おうとする修験道が発達した。修験道は仏教の中では特に密教と関連が深く、体系化された山岳修行の例として無視できない山岳信仰の一側面である。